フランス系カナダ人のアイデンティティの模索

—— コミュニティの伝統と変貌 ——

立　川　信　子

2009年アメリカ合衆国でオバマ大統領が誕生した。変革，環境保護，多民族の融合などをスローガンに劇的な選挙戦の結果である。多民族の多文化を強みとして打ち出す国は隣のカナダも同じである。カナダは多文化，多言語を国の長所として掲げている。カナダは二つの列強の植民地獲得競争の結果，生まれ，その後多くの移民によって作られてきた国であるからである。

地方というとき中央というものが当然想定されている。フランスにおいてはパリが19世紀から20世紀にわたって中央として強い求心力をもっていたことはすでに論じられてきた[1]。そしてそれはフランスが世界の中で重要な役割を果たした時期と重なっている。従って，パリとフランスは先進的な文化をこの時期には代表していたといえる。しかし，この時期においてもフランス文化はかならずしもどこにおいても優勢な文化であったわけではない。カナダではフランス文化は英語圏の文化に常に圧迫されており，ケベックなどフランス語圏では文化を擁護しフランス語圏の独立を保つための運動は今も続けられている。カナダにおけるフランス文化圏は英語圏と言う政治的主権を得た文化圏とフランス本国という二つの文化のいわば地方のような意識をもってきたといえる。ブシャールはそれを次のように言っている。

> ケベックはヨーロッパとアメリカという二つの世界の妄想から逃れて，「隙間の文化」として自らの文化を構築し，本道を外れて自らのいかがわしい世界を探究すること，そこに本来の使命を見出すことになるだろう。実際ケベックは第三世界である。だが，貧しさゆえではなく，*中心からは離れているゆえに*である。手本にしようとした二つの世界［ヨーロッパとアメリカ］の喪失，それ故の悲嘆は，ケベックを孤児ではなく，まさしく非嫡出子とした[2]。

さらにカナダでは植民地創設以来の英語系とフランス語系以外に多くの別の文化を持つ移民を受け入れて，多文化主義を掲げている[3]。カナダ大使館の広報にも明らかに表れている。

> 国際的に見ると，英語を話す人口は8億5,000万人，フランス語を話す人口は2億8,300万人と推定されている。また，仏語圏

（1）　立川信子，「フランスの都市と地方の関係についての文化面での眺望－マンドレ・ジッドの「『根こそぎにされた人々』について」をめぐって」，地域創成研究年報，第2号，愛媛大学愛媛創成センター，2007年 pp. 24-30。

（2）　Gérard Bouchard, *Genèse des nations et cultures du nouveau monde, essai d'histoire comparée*, Boréal, 2001；訳，ジェラール・ブシャール（立花英裕他訳）『ケベックの生成と「新世界」：「ネイション」と「アイデンティティ」をめぐる比較史』渓流社，2007年，p. 205。イタリックは論文筆者による。

（3）　関根政美は多文化主義を「多様性を認めながら社会統合するという視点」と定義している。そして，そこには「各集団間の文化と平等を認める集団間の平等（集団主義的平等）とその集団内と集団を越える個人の平等（個人主義的平等）のふたつの原理がぶつかる」と言っている。関根政美，「国民国家と多文化主義」，初瀬龍平編『エスニティと多文化主義』，平成8年，同文館。

諸国の人口は世界人口の11%，世界の国民総生産合計の10.7%，世界貿易の15.8%を占めており，明らかに英仏語両方の知識を持つことは，新しいマーケットを制覇するための戦いで優位に立つ要素となる。二言語国家としてカナダは，その強みを持っていると言えるだろう。

そして今やカナダ自身がいわば地方の集まりのようになって，アイデンティティを模索している。ここではフランス語系の文化の具体的な例を分析し，フランス語系カナダ人のアイデンティティとはどういうものかを考えてみよう[4]。

文化という概念は広範かつ曖昧である[5]。たとえば，現在少なからぬ国が少子高齢化に直面しているが，世代の関係の問題も文化と，文化の構成要素であるいわゆるモラルの変化に関わっている。複数の世代の同居する大家族と核家族というような家族構成もまた社会経済的基盤だけでなく，文化によって作られているからである。今日本では韓流ドラマがテレビの放映やDVDによって流入しているが，この視聴が中高年層に流行しているのは韓流ドラマに，以前の日本にもあったように思えるモラルや精神性を見いだし，共感していることも一因ではないだろうか。テレビドラマに描かれるのはもちろん現実ではないが，理想化というような想像力の作用を媒介として現実を分析する媒体になりえる。特に歴史ドラマには想像力の範囲が大きくなるのでよい媒体となりえる。またいわゆるサブカルチャーと呼ばれる大衆向けの娯楽の創作物は視聴者の嗜好に合わなくてはならないという商業的な役割からも一般的な大衆の意識を分析するよい資料となる。韓流ドラマでは親子関係をみても，精神的にも物理的にも共同体をなしている。主従や男女の人間関係の感情もめったに変わることなく，一貫している。例はいくらもあるが，『商道』（2001年～2002年）の家族や商団はその良い例である。現在の日本では核家族の概念は利己主義の延長としか考えられない場合も少なくない。そのような狭量な家族の概念の広まる中で，国の財政引き締めによって介護は家族の領域に大幅に依存し，しかも家族をささえてきたモラルや社会的基盤もなくなって少子高齢化社会は漂流しているかのごとくである。この事態を暗々裏に感じる日本の視聴者に韓流ドラマがある種のカタルシスを提供しているのではないかと考えられる。このように文化とは同じ国においても世代によって差異がある。そしてかえって国境を超えて共感されえる。

それに対して，フランスのドラマは日本に紹介されることが少なく，映画も日本に紹介されるのは恋愛をテーマにしたものに偏っている。そのためもあってか，個人主義や核家族の代表のようにみられる傾向が強い。たとえば，20世紀前半の知識人を代表したアンドレ・ジッドは戦前戦後と日本に紹介され大きな影響を残した作家であり，この作家のさまざまな側面のうち，家族によって表された社会道徳に対する否定的な言動は特に強調された。「家族この憎むべきもの」ということばは有名である。しかし，後年ジッド自身自分が家族を憎んでいた訳ではないし，自分の家族に迷惑をかけられたわけではないと言っている。ジッドは家族が閉鎖的な自分の利益のために外部の者を閉め出す集団としての圧力をもち，外部に対しても内部に対しても構成員の発展を阻害することに警告を発しているのであって，あらゆる家族を否定しているわけではない。個人としての親兄弟を否定して信仰を共有する弟子と共に生きたキリストの生き方を模範としているのである。実際にはフランス本国において家族形態は地域などによって多様であることをトッドが論じている[6]。ま

（4）　本論文は2008年7月，8月ケベック州政府の援助による研修で収集した資料に基づいている。ケベック州政府，国際交流省，在日カナダ大使館及びケベック大学に感謝する。

（5）　文化の概念についてはテリー・イーグルトン（大橋洋一訳），『文化とは何か』，松柏社，2006年を参照。

た都会に多い核家族においても必ずしもいつも核家族であるわけではなく，長い休みには複数の世代が同居して過ごすことが少なくない。他方，フランス人は一般にはアメリカ合衆国と同様に，成人した子供と生活共同体をつくることは少ない代わりに，経済的な援助も日本ほどにはしない。学費が低く抑えられており，また寮なども比較的整備されているなどの社会的な条件によって可能であるともいえる。フランス人の個人主義は政治や教育が宗教から分離して100年を経て宗教に興味を持たない人々が多くなった現在においても，ある程度キリスト教などによって養われてきた人間主義と，社会的な連帯による社会保障制度によって補われているということができる。フランス人がもっとも尊敬する人物としてあげるアンケートの中で最高位はピエール神父である。終戦直後のフランスでの生活手段のない人々を廃品回収業で援助した活動から始めて，最近の住居のない人々を不法占拠によって援助した戦う聖職者である。2008年にはその女性版で，エジプトのゴミの山の子供の救援活動に携わっていたシスター・エマニュエルの死亡は大きく報じられていた。ジッドの言葉に現れているような，フランス人の個人主義というものがあるとしても，それはこのような背景のもとで，さまざまな社会的な構造の中ではじめて存在しているのである[7]。従って，韓流ドラマの中の人間関係とフランスの人間関係の基本的な部分の間には表面的に見えるよりは違いは少ないともいえる。

しかし，もちろん現在と100年前の日本間の文化の差は相当に大きく，また一見グローバリゼーションで普遍化しているようにみえながらも，フランスと日本の間には前述の親子関係のような身近な例をとってみてもかなりの違いがみられる。世代の問題も複数の文化が共存している問題と類似していると言えよう。いずれにしても文化は個人の価値観や生き方に大きな影響を与える。そしてその文化を伝達するのに基盤の役割を果たすのが言語である。複数の文化が共存する社会の形成について考えるには，カナダにおけるフランス文化はよい対象である。

1　ケベックの民族と言語

カナダは植民地化がフランスとイギリスによって激しく争われた地域の一つである。フランスが戦争の敗北などによって領土をイギリスに譲ることに終わった。それは二つの結果をもたらした。一方では，ケベック州で，フランス語を使う人々が多く，英語系の人たちと共存しながらも，フランス語系住民の独立を維持しようとしてきた[8]。他方，大西洋沿岸地域のアカディアではイギリス系住民によって先に入植していたフランス系の住民は強制的に離散させられた[9]。従って二つの地域においてはフランス文化の存在は大きく異なっている。まずケベック州でのフランス

（6）　エマニエル・トッド『新ヨーロッパ大全』，藤原書店，1992年；又家族の概念も通時的に変化している。もともと「ラテン語の「ファミリア」は非常に古く，（…）この言葉の基本的な意味は「家」である。その意味は，一つの家に暮らす人びとの全体であり，奉公人や家内奴隷も含まれる。」M. ミッテラウアー，R. ジーダー，『ヨーロッパ家族社会史－家父長制からパートナー関係へ－』，名古屋大学出版会，1993年，pp. 8-9。

（7）　以下に同様の意見を見ることができる。「個人は常に一人で，何者も彼をたすけることはできないという思想は，確かにヨーロッパの思想の原点にあることはありました。しかし，ヨーロッパはこういう思想を原点としながらも，そこにさまざまな工夫を凝らして近代の個人と社会の関係をつくりあげてきたわけです。したがってヨーロッパの場合は国によって，時代によって違いますが，そういう本来ばらばらな個人が結び合って社会をつくるときにどういう工夫が必要かということに経験を積んできました。それが中世から近代にかけてのヨーロッパの歴史だと思います。日本の場合は，そういう苦労をそれほどしていないのです。」阿部謹也，『ヨーロッパを見る視角』，岩波書店，2006年，pp. 80-81。

（8）　木村和男編『カナダ史』山川出版社，1999年。

（9）　市川慎一『アカディアンの過去と現在－知られざるフランス系カナダ人』渓流社，2007年。

文化の占める割合をみてみよう。次にそれぞれの地域で世界に比較的知られた大衆文化に分類されるものを取り上げてその中でのフランス文化の役割について考えて見よう。

カナダは『エスニシティと現代国家，連邦国家カナダの実験』（1999年）によると[10]，1871年にはアングロ系60%，フランス系31%であったが，1971年にはアングロ系は41%に減少したのに対して，フランス系は30%を維持している，その他の言語系は1871年には7%であったが，27%に増加した。1991年にはアングロ系28.1%，フランス系22.8%である。つまり，多元化，多様化した[11]。著者は「諸民族の文化的遺産を尊重し，かつ『カナダ的なもの』の形成が課題である」とみている。しかし，アイデンティティに関する見方はざまざまであり，後で見るように形成は不要であると言う見方まである[12]。

ケベック社会は他の北アメリカ社会とは異なるカトリシズムの住民の精神と生活，農本主義に基づく「神の国」，伝統を固辞し，ブルジョワ的自由主義とは全く結びつかず，家族と共同体が社会の重要な制度であるとされてきた[13]。しかし，現代では45%はモントリオール都市圏に住む。また，以前から英語系住民に比べてフランス語系住民が経済的に劣るとされている。1899年にヘラルド紙がフランス系カナダ人の所得はアングロ系の隣人の4分の1にも満たないと書いている。ブシャールは次のように批判している。「歴史記述は，エリートの掲げる，使い古された決まり文句の再生産で満足している。すなわち，フランス系カナダ人のネイションの特質は，フランス語，カトリック，社会制度，慣習のうちにあるというものである。そもそもこのようなステレオタイプを越えたところにこそ，あらたに発見すべき領域，すなわち多様性と変容がある。」[14]

上述のように，ケベックはフランス語を擁護してきた[15]。そしてフランス語は英語に並ぶカナダの公用語となった。フランス語が英語と同様の位置を認められたことに関しては使用人数だけではなく，歴史的な由来とフランス語の国際語としての地位にもよっており，他の言語からの反発がある。使用言語は政治文化的な独立性の旗印と役割をしている。しかし，カナダ大使館の広報はそれに関して次のように述べている。

> 「公用語法」はフランス語と英語をカナダの公用語と定めており，また英語またはフランス語以外を話す語学的少数集団の意気を高め，公用語習得を支援する特別な施策をとっている。カナダの連邦機関は二言語によるサービスを提供して，これら2つの公用語の平等を反映させなければならない。
>
> 「1982年憲法」はフランス語と英語をカナダの公用語に規定しており，2つの言語はカナダ政府のすべての機関における使用に関して平等に位置づけられている。

又実際のフランス語の使用に関して，近年の履修者の増加が指摘されている。二言語を維持するための努力は政府によって，またマスコミにおいてもなされている[16]。

> 2006年の国勢調査によるとケベック州の人口の約80%がフランス語を母語としており，ケベック州住民の約83%が家庭でフランス語を話している。ケベック州以外に住む，フラ

(10)　中野秀一郎『エスニシティと現代国家，連邦国家カナダの実験』有斐閣，1999年，p. 33，p. 35。

(11)　石川一雄『不調和の調和』加藤普章，『カナダの多文化主義の意味するもの』を参照。

(12)　「今後のネイションを考える際にふさわしい概念とは共同統治co-intégrationなのである。」ブシャール，前掲書，p. 450。

(13)　中野秀一郎，前掲書，p. 62。

(14)　ブシャール，前掲書，p. 79。

(15)　カナダにおける多言語教育に関する法，「1969年に連邦政府は公用語法を発令した。フランス語振興法，国民連合党政府による法令63号であるは英語教育を制限している。」州公用語法。1974年の法令22号。フランス語憲章，法令101号。

ンス語を母語とするカナダ人は100万人以上いる。

カナダでは約960万人がフランス語を話し，その内約27％は，ケベック州以外に住んでいる[17]。

カナダ全国の学校でフランス語を学ぶ子供たちはますます増えている。1978年に３万7,800人だったフランス語イマージョン・プログラムの登録者数は，1996～1997年度には31万2,000人に激増した[18]。

1995年に，270万人の若者（学生の54％）がフランス語あるいは英語を第二言語として学んでいた。これは25年間で10％の増加にあたる。

ケベック州は英語圏のなかで，フランス語圏の中心として，独自のアイデンティティを主張し，カナダの中で独立性をもち，フランス語圏の文化の普及に多くの力を注いでいる。フランス語がケベックで公用語となったのは1974年である。ケベック州はケベック州の独自性とフランス語圏としての活動を強調する広報活動を行っている。発表された数値はカナダ政府の広報を裏付けている。

全人口　2006年　7,651,000人

受け入れた移民　2006年　44,686人

アフリカ29％（北アフリカ　20.2％　その他の地域　9.6％）

アメリカ20.2％（中央及び南アメリカ13.4％　その他の地域　6.8％）

アジア29.5％（中近東，西及び中央アジア11.1％，東アジア11.7％，他の地域11.7％）

ヨーロッパ　20.3％（西及び北ヨーロッパ9.3％，東ヨーロッパ10.1％，南ヨーロッパ0.9％，オセアニア及び他の地域0.1％）

移民の範疇

経済的移民58.2％　家族の呼び寄せ23.3％，難民15.9％，その他2.7％

母国語　2006年

ケベック　フランス語79.0％　英語7.7％，非公用言語11.9％，一言語以上　1.3％

モントリオール　フランス語64.9％　英語11.9％，非公用言語21.2％，一言語以上2.1％[19]

非公用言語の比率が高いが，ここには移民の出身からみて中国語とスペイン語が大きな比率を閉めていると推測される。

英語とフランス語の二カ国語併用率はケベックの公式発表によると，ケベック州では40％以上，

---

(16)「ソシエテ・ラジオカナダ」（CBCのフランス語部門）（...）「レゾー・ドゥ・ランフォマシオン（RDI）」（...）その目的は，カナダ国内全域にフランス語による時事番組の提供を保証することである。

カナダ政府は，ケベック州およびカナダの他の地域のテレビ放送網グループを，国際的なフランス語放送のコンソーシアムTV５の一部として援助して（...）いる。」

(17)「日常的に英語を使う人の割合は６割程度，フランス語は２割程度である。フランス語が主に使われている地域はケベック州，オンタリオ州，ニューブランズウィック州のアカディア人の多い地域，およびマニトバ州の南部である。このうち，ケベック州はフランス語のみを，ニューブランズウィック州は英語とフランス語を公用語とし，他州は英語のみを公用語としている。なお，ヌナブト準州では英語とともにイヌクティトゥット語が公用語となっている。

公用語以外の言語を使う住民も500万人ほどおり，中国語（広東語が多い）の話者が85万人，イタリア語が47万人，ドイツ語が44万人，などである。また先住民の中には個々の部族の言語を使うものもいるが，多くの言語はだんだんと使われなくなっていく傾向にある。」ウッキペディア，カナダ，2009年１月。

(18)「TWBPプログラムは1970年代にカナダで導入されたフランス語集中教育モデルで，その後アメリカで開発された。バイリンガルモデルの統合である。」フィリップ・ピングズリー，トム・ウォーリー，「バイリンガル教育での多文化的視野の習得」，『多文化共生社会への展望』，日本評論社，2000年，pp. 196-299。

(19) *Le Québec chiffres en main*, édition 2008, Gouvernement du Québec, Institut de la statistique du Québec, pp. 9-12.

モントリオールでは57%となっている[20]。現在ではフランス語教育が義務化されているので，英語系に二カ国語併用者が多く，それに比べるとフランス語系には少ない。就職には英語使用者が有利なためにかえってフランス語系に就職上での不利が生じていると言われている。

2　フランス系カナダのアイデンティティの形成

カナダがイギリスの影響下からアメリカ合衆国の政治経済的および文化的影響下に移り，それに対抗してカナダとしての独自のアイデンティティを追求してきたことはカナダ史のなかに深く刻まれている。ブシャールはケベックの特徴を次のように挙げている。

（a）あらゆることにおいて母国フランスをモデルにしようとする意思。

（b）その一方，母国と差異化し，当地の生活と折り合いをつける必要性。その結果として半断絶の誕生。

（c）アメリカに対して魅力を感じると同時に，脅威を感じると言う二律背反の関係

（d）知識人文化と民衆文化の間につきまとって離れない緊張関係。

（e）自分の国の文化に独自の名前を与えることの困難。そのことに起因する，知識人文化特有の遅滞。

（f）両立不可能な理想の追求。そこから発する，知識人の発言内容の諸説混合と二律背反，あるいは曖昧な思想[21]。

その原因はあらゆる面での依存にある。中央から離れているということから生じた文化的貧困から脱出するにはケベックはどこかに正当性を求めることをやめなくてはならないと結論づけている。

経済，政治，文化の面ではフランスに，宗教面ではヴァチカンに，経済また文化の面ではイギリスとアメリカ合衆国に，政治面ではイギリスとカナダに，という具合に依存関係を結んだのである。(...) 知識人文化と民衆文化の間の二律背反がもっとも目立ったのは，おそらくケベックにおいてだった。(...)

両者の亀裂は極めて重要であった。それは文化的抑制－文化的貧困化という二重の現象を引き起こし［た］。(...) このネイションは上層からはヨーロッパの借用文化として織り上げられ，下層からはアメリカ大陸からの刻印文化として混血させられた。(...) 受け継いだものを混ぜ合わせたり捨て去ったりしながら，現実，想像，虚構を問わず先祖と絶縁して，やがて独自の立場に立って，独自の運命を考案することになろう[22]。

ケベックの依存関係は，一つは英語圏に対して，もう一つはパリと中心とするフランスに対してである。言語は文化の基盤をなしているが，ケベックのフランス語をとってみてもフランス本国のフランス語と語彙や発音に関してはかなり異なっている。ケベックの人がフランスへ行って道を聞いたらフランス語を話してくれと言われたという笑い話が語られているほどである。しかし，実際にはそれほど異なっている訳ではない。フランスの中にも方言は各地にある。またフランスで移民やその子孫の話すフランス語は移民の出身の言語のアクセントや発音が残っていることが多く，移民であることが識別できる。それとそれほど違う訳ではない。また教育レベルが高く移動の機会の多い人ほど標準語に近いフランス語をつかう。ブシャールはこの状態にもケベックの分裂をみている。

独自の自立した文学というものは，真の意

(20)　ケベック国際交流省『ケベック州概観』。
(21)　ブシャール，前掲書，p. 135。
(22)　ブシャール，前掲書，pp. 196-206。

味でのネイション言語を基礎にしてこそ初めて成立する，ということである。(…) ケベックは，パリのフランス語，国際フランス語，ケベックのフランス語という変異形のどれを選ぶかで，深く分裂しているからである[23]。

ケベックの受け継いだフランス文化とは主として革命以前の文化で，古典主義というような理念的なものではなく，もっと社会的なものである。しかも，フランス本国は19世紀から20世紀にかけて大きな発展を遂げた。王制は革命によって共和制に変わり，政治と宗教は分離された。文化もまだ次々と変革され新たなものを生んだ。経済的発展と社会と文化の成熟，教育の拡充などがこの発展をささえたのである。文化の発展は次の文化の発展を呼び，文化自身が過去の自分の文化を否定する力さえも持っている。フランスはむしろ20世紀前半にはジャワ島やアフリカの文化を発見したアルトーやピカソを生むのである。したがって，同様の発展を社会的にも経済的にも十分な基盤がなく，歴史的な蓄積もない移民と文化の異なる先住民が生むことはむずかしく，その乖離は上述の（a）で言われているような追従と，逆にそれを揶揄する動きも生じた。アフリカの旧植民地でフランスにとっては古典とされる17世紀のフランスの劇作家を読むことにどういう意味があるのかというのは以前から問われてきたことである。インドシナ生まれのフランス人作家デュラスは教育を受けること，または学校へ行くことを拒否する子供をしばしば描いている。植民地での教育とは，そしてある国の教育のなかで古典として何を扱うかは移民の子孫にはある種の策略を感じさせる問いかけなのである。

他方，取り巻く英語文化とはアメリカ的な合理主義と物質主義が主体になっている。ヨーロッパではイギリス文化とフランス文化の関係は時代によって変化してきた。イギリスが政治的にまた経済的に先進国であった19世紀にはボードレールがダンディズムというようなイギリス文化をフランスに普及させた。またボードレールの掲げたロマン主義は，それまでのフランスが国の文化としてきた古典主義の理性や調和を重んじる美学とは対照的な，感性を重んじる美学である。従ってイギリス文化は感性的，フランス文化は理性的という対比の概念が生じるわけである。しかし，カナダでは英語系とフランス語系の対比はいわばむしろ逆転している。

ケベックにはフランスとは異なる文化が上述の（b）で言われているように生じる。独特の社会文化的特徴はブシャールによると，「農村でも都市でも，個人主義（家に囲いをめぐらすこと，近隣に対する競争意識）と共同体主義（居住地の近接，相互扶助の実践）との興味深い融合を指摘できる。」[24] しかし，ケベックも変化している。もし，こういう共同体がカトリック信仰や開拓の農村から生じたものだとしたら，現在では出生率は低下，離婚が増加している[25]。つまり，少なくとも人口の集中しているモントリオールなどの都市ではカトリック的な家族や共同体の概念は薄れたといってよいだろう

現代のフランス系カナダ人のアイデンティティは曖昧である。ブシャールはそれを次のように分析している。

フランス系カナダ人は，自分たちが慣れ親しんできた主要な特徴を，新しいケベック・

(23) ブシャール，前掲書，p. 431。
(24) ブシャール，前掲書，p. 170。
(25) 2001年　結婚数　21,961　離婚数　17,094
5,945,900人中，配偶者と生活する数57.3%（正式に結婚している数40.3%　結婚していない数17.0%）配偶者と暮らしていない数42.7%。
2006年　夫婦がそろっている83.4%　子供なし48.3%，子供有り51.7%（１人41.2%，２人41.8%，３人以上17.0%）*Le Québec chiffres en main*, édition 2008, Gouvernement du Québec, Institut de la statistique du Québec, pp. 9-12。

ネイションへと拡大することを断念した。（…）彼ら自身のアイデンティティを徐々にそこに見出せなくなってきているからである。そういうわけで近年歴史の浅いネイションは，象徴面での一体性を再構築するために，新たな拠り所に向かって少しずつ向きを変えてきている。以下のその例である。

(1)アイデンティティを普遍的な価値観を土台として，その上に据えること。

(2)地理的環境に基準を求めてアイデンティティを育むこと。そこは中立的な象徴の場となり，あらゆる亀裂を越えた和解の場となる。

(3)先住民の伝統に（…）助けを求めること。

(4)多様性そのものがアイデンティティの本質だとする。

(5)アイデンティティに代るもの，もしくはそれにまさるものとはアイデンティティの探究，及び象徴の構築と再構築する際の民主的手続きであると表明すること。そしてそれは適応から生まれるものである。

(6)ポストモダンなネイションは，単独のアイデンティティであれ，複数のアイデンティティであれ，そのようなものは必要としないと単純に宣言すること[26]。

(4)の地理的環境はすでにカナダ文化が独自性を持った最初の例といえる。国と地方のアイデンティティが成立するためには風景が大きな役割を果たしたとアラン・コルバンがすでに指摘している。19世紀においては郷土paysが実体であり，風景paysageはその要素にすぎなかったが[27]。

20世紀初頭，風景という問題が生じた背景には地方主義とナショナリズムがありました。立法機関が国家にたいして，『自然遺跡』を保護すべきであるという義務を課したわけです。1906年の法律はフランスの風景の国有化を画するものであり，その意味できわめて重要なのです。社会の絆が地理的な結びつきと考えられていたのに，美しい景観が損なわれるのを放置するのは，国家にとって国民的アイデンティティの主要な要素のひとつを死滅させるに等しいことでしょう[28]。

同じことがカナダの国家的アイデンティティの成立に関しても生じた。カナダの独自の文化の創成期を画するものとして，グループ・オブ・セブンが挙げられる。

1920年代は，カナダの国家的地位の向上を反映し，特にイギリス系カナダ人の文化的ナショナリズムが定着した時代と言われ，その代表が20年に結成された７人の画家集団であった。（…）大胆な色彩と荒々しいフォルムで表現されたオンタリオ北部の風景こそ，国家のシンボルであり，『北』は，工業化と物質主義が精神を衰退させた，『南』（アメリカ）に対抗する力ととらえられた[29]。

ヨーロッパの印象主義の影響から出して，フォービズムを様式化したような，具象から抽象へというヨーロッパと同じ行程をたどりながら，カナダの非人工的な自然という具象を明確に保っているカナダの独自性の表現である。しかし，この絵画の運動はその後発展しなかったといわれている。

---

(26)　ブシャール，前掲書，pp. 438-440。

(27)「郷土というのは，とりわけ19世紀フランスで国土の再配列や空間的アイデンティティの構築が行われた際に，その基礎となる実体でした。その過程で，風景は単なる一要素にすぎませんでした。ところが，空間把握がアイデンティティの形成様式に寄与するかぎりにおいて，空間把握はあらゆる感覚に関与してきます。」同上書，p. 19。

(28)　アラン・コルバン『風景と人間』，藤原書店，2002年，p. 163。

(29)　『カナダ史』前掲書，pp. 262-263。

写真１

写真２

写真３

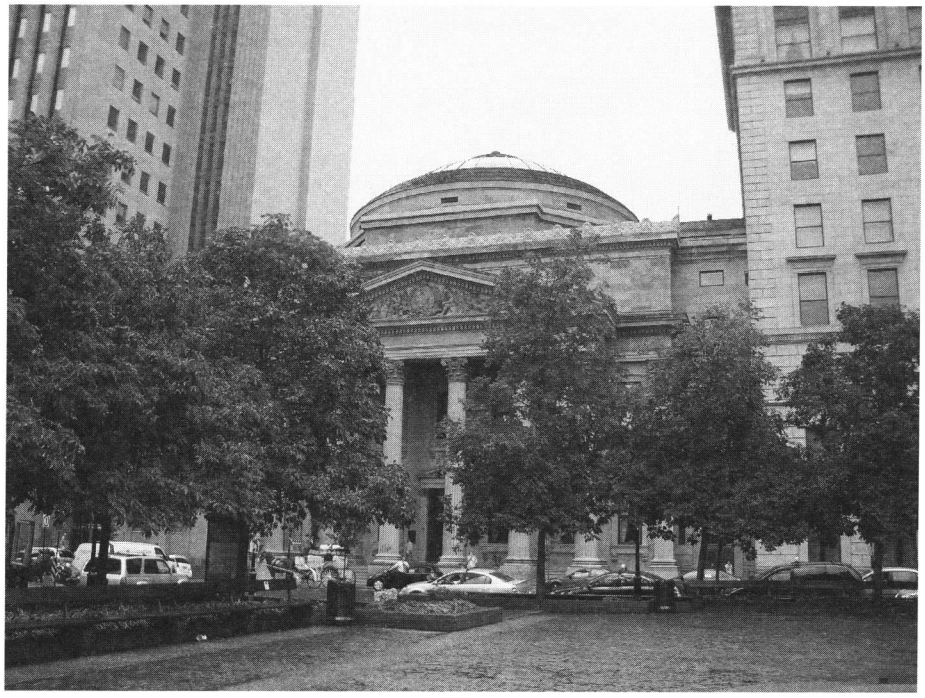

写真４

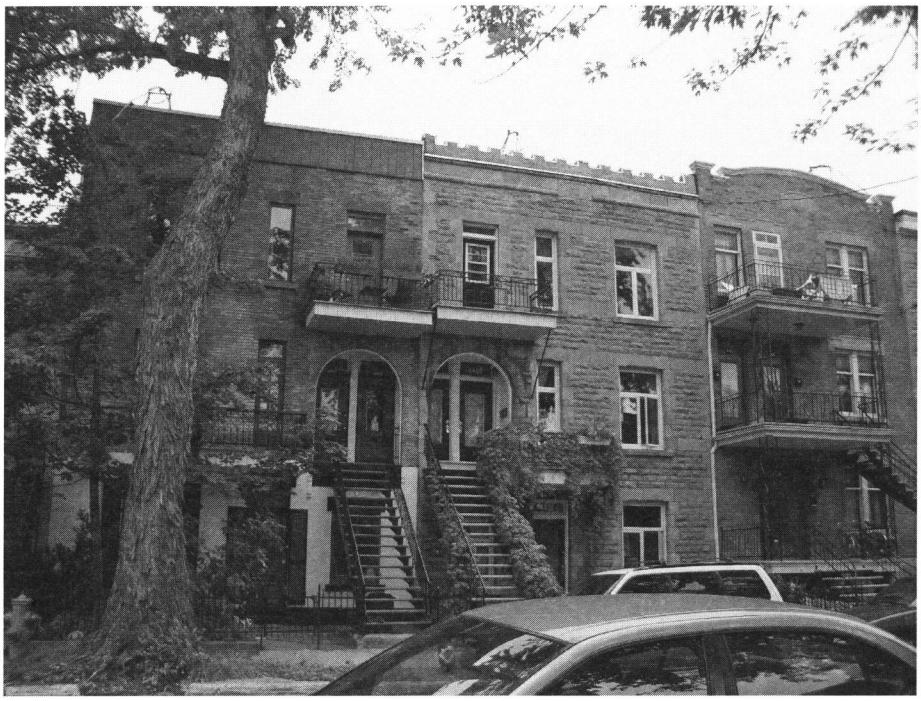

写真５

季節，牧歌的な風景，広々とした野生の空間，新たなアイデンティティの原型となる広大さを多用した様式もしくはスタイルが生じた。その後カナダ絵画は，フランス語系と同様，都市，産業，労働，日常生活といった平板な主題しか見出せなくなっていった[30]。

では次に別の形の文化を見てみよう[31]。

３　多文化と調和

ブシャールは知識人の文化と民衆文化がケベックでは乖離してきたと言っているが，映画は，一部のいわゆる前衛的なものを別にすれば，民衆文化に分類されるだろう。また，民衆文化を伝達する手段になりえる。カナダの文化はアメリカの陰にあってあまり日本には知られていない。映画製作上でのアメリカ資本との関係からの問題が指摘されており，また，ケベックの映画についてはフ

(30)　ブシャール，前掲書，p. 360。

(31)「建築は，この国の地域や建築物の種類ごとに，実に多様で，断片化された世界だということである。」（ブシャール，同上書，p. 361）

しかし，ケベックの町はフランスとの類似点がある。モントリオールの古い町並みには教会が点在する（写真１）。町の高台の墓地には先住民の英雄も葬られ，市民の散歩の場所である（写真２）。モントリオールより規模の小さいケベックシティには比較的古い町並みが残っている（写真３　祭のケベック・シティ）。

しかし，確かに，多くの相違点もある。モントリオールには摩天楼や，古典主義を模した建物がある（写真４）。19世紀に都市計画によって大改造されたパリのように一様ではない。特徴的な家屋はフランスにはない移民の生活をよく示している（写真５）。冬の酷寒にもかかわらず建物の外に作られた階段は子供の多い家族がスペースを家の中にふやし，しかも建築費を低くするために作られた。

ランス文化としてのアイデンティティが強く意識されていると論じられている[32]。しかし，ここでは全般的な視点ではなく，カナダのフランス文化圏で作られ，それを対象にした映画を取り上げてそこに描かれる家族について分析する。一つは『大いなる誘惑』*La Grande Séduction*（2003年）である[33]。海からしか外界と連絡出来ない僻地，大西洋岸のフランス系の村で，漁業の漁獲制限のために漁が制限されてさびれた村にプラスチック加工という新しい産業を誘致しようとする。そのためには医者がいることが条件になっている。期限付きで招かれた医者を引き止めるために村人がいろいろな工夫をこらす。都会の病院に勤めていた医者は英語系の趣味を持っている。英国の貴族趣味であるクリケット（アメリカ人の好む野球に近い）とアメリカ趣味であるジャズを好む。それに対してフランス系の村人はアイスホッケー（フランス人の好むサッカーに近い）を好み，昔ながらの共同体の中で暮らしている。村人は医者を引き止めるためにクリケットが好きなふりをするなど，いろいろな細工をする。その細工の虚偽にもかかわらず，村人と村の自然とふれあううちに，医者は，都市の恋人が自分をだましていることを知ることをはじめとして，自分の快適に思えた生活は英語圏の発展に影響を受けた都市の物質主義と嘘に固められていて，村のなかにこそ人間らしい生活があると思うようになり，村に定住することに決める。村も新しい産業を見出して，活気をとりもどす。

地方の衰退，漁業の衰退という深刻な問題を喜劇的なタッチで描いて，しかも感動的な物語になっている。フランス語系と英語系の文化的対称性を用いて喜劇性を出している。ここではフランス的なものは地方的で自然に近く，共同体をつくり，人間の生活として価値あるものであるのに対して，英語系的なものは都会的で人工的で虚偽のものである。つまり，ここに描かれるフランス的なものは都会の文明から取り残された僻地にこそあり，先に述べたカトリック信仰を支柱に持つ神の国と似ているのである。

もう一つの映画は『蛮族の侵入』*Les Invasions barbares*（2003年）である[34]。2002年モントリオールで，大学を退職した教師が癌のために死に瀕している。この主人公はサルトルなど1960年代のフランス文化が活発な生産をしていた頃の知識人である。15年位前離婚によって家族は崩壊している。主人公は戦後のフランス文化を体現しているといえるだろう。息子は成功した実業家でロンドンに暮らしているが，離婚した父との間に交流はなくなっている。母の頼みで父を助けるために，フランス人の婚約者とともに帰国する。初めは合衆国での医療を勧める息子も，死に際して父の願い通り，雑多な父の友人を呼び集め，湖畔の別荘を借りて，友人と自然に囲まれた安楽死を選ぶ父と和解する[35]。娘は海に冒険旅行に出ているが，兄はこの妹と父をインターネットで結び，家族全員が和解する。この映画にも英語系とフランス語系を対照させた価値観を見出すことができる。それは一方で，前作の地方的なフランスではなく，父の人生が表す，無意味ともみえる思弁にみちたフランス的な知的世界である。そして他方に息子の生きる実利的な英語系的な世界である。息子は家庭を破壊した父の生き方を否定している。しかし，父が家族を愛していたこと，そして利益や実効のあるものだけを重視しないで，友人や自然との交感を選ぶことに共感していく。都会に場面を移し，崩壊した家族を描きながらも，カ

(32)　ピーター・ハーコード『映画とその神話的世界，ヨーロッパ，アメリカ，カナダの国民文化の形成』晃洋書房，1992年。

(33)　Réalisation, Jean-François　Pouliot, ; Acteurs, David Boutin, Luicee Laurier ; Scénario, Ken Scott.

(34)　Réalisation, Denys　Arcand ; Acteurs, Rémy　Girard, Stéphane, Rousseau, Dorothée Berryman, Louise Portal ; scénario, Denys Arcand.

(35)　L. M. 写真６　Mont tremblantから湖を見る。

写真６

トリック的なある種の共同体と神の国を息子自身が作り出していったということができるだろう。つまり，英語系的な物質的価値以上に，フランス的な精神的価値を認めるようになるのである。ここでいう英語系的，またはフランス語系的というのはそれぞれアメリカ合衆国とフランスに起点をもつ文化圏の価値観を表している。息子がアメリカでもフランスでもない，その中間にあるロンドンに住んでいるのは示唆的である。これらの価値観は前作よりも屈折し，さらに抽象的でもある。フランス的な共同体性はこの二つの映画においてすでにあやうい形でした存在していないからである。前者では物質的な意味で後者では精神的な意味で不安定である。

二つの映画にはフランス系と英語系という二つの文化圏を形容する決まり文句はそのままあてはまる。書かれたものである文学よりも，固定観念を否定したり，越えたりする内容を描くことは，商業ベースの映画にはむずかしい。一般の人々がもつ固定観念を具体化することで映画はしばしば創作される。スタンダールが書いたように後世の世代が共感することを考えて，映画をつくることは容易ではないだろう。しかし，この映画はフランス語系と英語系の文化の固定観念を越えて，虚構によって共同体や子供の世代の感性を非現実的なほど理想化している。環境と世代によって変化した共同体や家族はそれほど問題をかかえているのであり，その問題に調和の可能性への模索を提示しようとしている。

このような家族の概念はそれでは果たしてカナダでフランス的と考えられているものに特有なのだろうか。カナダ文学の中でもっとも世界に知られた英語系の物語『赤毛のアン』（1908年）を見てみよう[36]。この小説はプリンス・エドワード島というフランス系植民者の離散の地アカディアが舞台である。作者L. M. モンゴメリはこの島の歴史に殆どふれていないし，日記の中にもフランス人に関する好意的な記述がないことが指摘されている[37]。この小説が一人の少女の成長をテー

マにしていることからみてもそれは不自然ではない。しかし，カナダを考えれば，そういう普遍的なテーマにもかかわらず，この小説が非常にカナダ的な小説であることに気がつく。まず，テーマが養子とその子供の適応の問題である。カナダは多くの移民によって作られた国である。家族，そして民族の合成は重要な問題である。この小説はマシューという農夫がアンを単に労働力としてではなく，家族として受け入れたいと願う時から始まり，成人したアンを実の娘のように思うマシューの死によって閉じられる。つまり家族形成の成就の過程が小説の枠組みを作っている。

次に，フランス的なものといえるものを見出すことはできる。アンは最初から周囲に好意的に受け入れらたわけではない。旺盛な想像力によってしばしば葛藤をもたらす。アンの名前のつづり字にeをつけてくれというのも，実利主義の農家の人々には馬鹿げたことである。この発音されない文字というのはフランス語の特徴でもある。すでに見たようにカナダではフランス的なものは世界的に作り出されているイメージのように優雅なものをさしているというよりは，土俗的で農民的なものをさしている。しかし，同時に実利的でないものをもさしているといえる。それの居心地の悪さのようなものがはからずも表現されている。

最後に，作者はプリンス・エドワード島を生まれて幸せだったこれ以上ないすばらしい島と言って愛したが，ここに描かれているのは林，農園，湖であって，あたかもイギリスの湖水地方のようである[38]。この島の観光地としてよく知られた海とバラ色の岩の海岸，漁師の村はまったく描かれていない[39]。海がすぐ近くにあったとしても，アンの生活圏という意味からは不自然ではないかもしれない。しかし，海はカナダにとって文化をもたらすとともに，紛争をももたらしてきたのである。コルバンは海はかつてレジャーの対象ではなく，恐れの対象だったと言っている[40]。アンの平和な世界には海や歴史は重すぎるということができるかもしれない[41]。僻地に残る漁師の村はフランス系であることもある。フランス文化の痕跡を消し去り，その上に湖水地方のような風景だけを重ね，シェクスピアに熱中する少女を描くことで英語系の文化が鮮明に表に出てくる。これは意図的な作為ではないが，アカディアのフランス系の住民の強制移住の後取られた政策を思わせる。

しかし，それにもかかわらず，先の作品とある種の共通の家族の概念を持っていないだろうか。先の二つの映画と『赤毛のアン』の間には100年近い時間的な距離があるので，比較して論じることはできないが，この小説が今なお読まれ，ミュージカルや映画の形でも愛されていることからみてもこのような家族のあり方を共感していることに違いはない。必ずしも血縁ではなくとも，また生まれた土地ではなくても，核家族のような血縁だけに基づくものよりももっと広い連帯感のもとに，自分で選んで共生する共同体としての家族と郷土の概念とそれを求める願望には英語系にもフランス語系にも本質的な違いはないといえるだろう。それがカナダの多文化共存が生みだしたでもあるのだろう。

以上の二つのフランス語系の映画にはあきらかに英語系とフランス語系の価値観の対比が現れている。非常に曖昧な言葉であるが，人工と自然と言い換えることができるだろう。しかし，フランス系の文化のこの家族や自然という従来の価値観

(36)　L. M. モンゴメリ（村岡花子訳）『赤毛のアン』新潮文庫，1997年；山本史郎『東大の教室で「赤毛のアン」を読む』，東京大学出版，2008年。

(37)　L. M. モンゴメリ『嶮しい道：モノゴメリ自叙伝－「赤毛のアン」が生まれるまで』，篠崎書林，昭和54年；市川慎一，前掲書。

(38)　写真７

(39)　写真８

(40)　アラン・コルバン『浜辺の誕生：海と人間の系譜学』，藤原書店，1992年を参照。

(41)　モンゴメリの父は妻の死後海を越えて移住し，別の家庭を作り，作者はその家庭には適応しなかったと言われている。海は家族を隔てるものでもあったのだろう。

写真７

写真８

もまた現代社会のなかで揺らいでいることを二つの映画は表している。そしてその揺らぎの中で確かな変わらないものとして，現れてくる共同体の概念は長い間読み継がれてきた『赤毛のアン』にも現れるような普遍的なものなのである。その意味で共同体と家族の概念の中で英語系とフランス系の文化的な差異は普遍的なものに収斂しているといえるだろう。

ブシャールの論に見られるように，異文化が統合されてアイデンティティが形成される過程の一つに挙げた，もともと英語系とフランス系は同じヨーロッパ的な価値観を持つ，異文化が同じ由来を持つとみなす見方もできる。また，それぞれの価値を普遍的な価値と結びつけて考える見方もできる。またはポストモダン的に統合やアイデンティティの形成そのものに意味がないという見方もできる(42)。しかし，もし単純化して，カナダにおいてフランス系的なものが共同体的なものを表し，英語系的なものが個人的なものを表していると言えるとしたら，これはやはり観念的には統合はされない二つの価値観である。むしろ，その両方を支え合わすことで社会は成り立っている。フランス語系の二つの映画の中では英語系的現実主義に圧倒されながらも，フランス語系的な理想主義の価値を掲げている。また『赤毛のアン』ではそれが英語系的やフランス語系的という色彩を脱して普遍的な理想化された家族の姿が描かれている。

先住民との紛争，黒人差別，フランス系住民の強制的離散，日系カナダ人の資産没収など，カナダの歴史は決して住民にも移民に優しかったとは言えない。だからこそ，虚構の中で，異質なものを受け入れてより豊かになっていくやさしい人々を作り出しているのかもしれない。このような歴史の中では少数派のコミュニティは，アイデンティティを持つことが生存のために不可欠であろう。理想化された虚構の中にフランス系カナダ人のアイデンティティとしての共同体性の模索を見ることができるだろう。フランス的とされてきた共同体性と生活の中から生まれてきた個人主義との融合によって形成されてきた伝統的なものを，あらたなフランス的なものや現代の問題から生じてきたものによって変貌させながらの生き方の探求は，ブシャールの言うように決定的な回答を与えるものではない。しかし，この融合体は不確定なままではあるがアイデンティティの追求を否定しているのではなく，受け継いだ原型をもとにして新たに作り出そうと模索していると言えるだろう。特に多文化共生の問題は，世代の問題にもつながる大きな問題である。カナダの中のフランス文化は独立性と発信力によってよい事例となる。2008年にノーベル文学賞を受賞したJ. M. G. ル・クレジョが世界の各地で創作してきたように，特に19世紀末以後のフランス文化そのものが単にフランス本国から発信されるわけでも，フランス本国を対象とするものでもなくなった。また，フランス自身も移民の問題をかかえているし，日本にも生じてきている現象である。ここでは限られた資料により，その一部を見たにすぎないが，「個人が社会を作る上でなされる工夫をする苦労」をあきらかにする手掛かりのひとつとなるだろう。

(42)「よく用いられる戦略は，差異として映る様々な特徴を，共通の起源を示す表象の中に溶かし込んでしまうというものだった。(…) 19世紀後半のフランス語系ケベックの文化史である。(…) ヨーロッパの知識人文化と，民衆文化，そればどちらの文化も，実際のところ，同一の文化的伝統の枝分かれに過ぎず，両者の起源は，最古の，そしてもっとも神聖なフランス文化にあるということである。一部の英語系知識人が，フランス系カナダ人とイギリス系カナダ人という二つの人種を，ともにチュートン人の子孫とみなし，実は近い縁戚関係にあることを示そうとした。」ブシャール，前掲書，p. 431-432。